

二〇二〇年度

豊島岡女子学園高等学校

入学試験問題

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は□**一**から□**二**、2ページから19ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答欄に記入してください。

□ 次の文章を読んで、後の一〜九の各問いに答えなさい。

(ただし、**字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。**)

人工知能（AI）が仕事を奪うことへの懸念が広がっている。とりわけ学生の将来不安は強い。早くから問題を指摘してきた数学者の新井紀子・国立情報学研究所教授に対策を聞いた。

——懸念するほどの変化が起きますか？

「①進化したAIが人類を支配するシンギュラリティー（技術特異点）のようなことは起きません。しかし、定型的な頭脳労働の一部がデジタル化されて、機械に置きかわるのは間違いない。デジタルは数値データの処理に最も威力を発揮するので、やはり銀行や証券、保険業界などへの影響は大きいでしょう。*ホワイトカラーの占める割合が大きな物販の営業部門あたりもAダイタイ
されます」

「理科系も安心はできません。生産性の低いプログラミングの会社は整理されていく。これから、2030年ぐらいまでの間に、デジタル化を前提にした最適化が進行し、非常に多くの業態が再編されるでしょう。おそらく誰もがこの劇的な環境変化に巻き込まれる」

□ □

——若い世代ほど将来不安が強いようです。

「どのみち想像をはるかに超えることが起こる。どの職業がAIに置きかわるか誰にも予想できない。どの進路が安全かと考えることは、もつとも意味がない。公務員になれば大丈夫とか、医師なら問題ないといった考え方は一番ダメな選択の方法だと思います」

「どうすればいいか。どんな状況でも、常に求められるのは②有能な人材です。卒業した学部や特技などとは関わりなく、基本的なスキルが高い、生産性が高い人です。つきつめると、それは読解力と論理力です。他の人と働くのであれば、コミュニケーション能力がそれなりにあれば、どんな世の中になっても怖いものはない。この3つの基本さえできれば、機械との競争には負けない。機械は意味を理解しませんから。労働市場で引く手あまたでしょう」

——政府や企業、教育機関もA I人材の育成やプログラミング教育などに力をいれています。それは読解力などの伸びにつながらない？

「先が見えない時代だから学生も親も企業も、すべての能力を備えなければと焦る。不安だから、あれもこれも手を伸ばす。経済界も政府も、英語もプログラミングもでき、コミュニケーション能力が高いといった理想像を描いてしまう」

「一方で、③かえって学習の基礎基本がおろそかになっている。2021年から新センターテストが始まるが、国語記述式問題の自己採点が合わない受験生が3割もいる。なぜだと思いますか。多くの高校生が自己採点を正確にできないのです。そうした基礎基本が欠落しているのに、あれこれやっても身に付かない」

「例えば、高度プログラミングに最も必要な力は正確な仕様書を書き、仕様書通りに実装すること。要は読解力と記述力です。加えてA Iを使うプログラマーに欠かせないのは、確率と統計と行列、微積分などの数学です。数学は苦手だけど、プログラミングを少し勉強しましたでは、Bソウバン淘汰とったされるでしょう」

□ □

——中高生の3人に1人が普通の文章が読めていないそうですね。

「A I研究を通じて考案したりデザインスキルテストを小学6年生から1部上場企業人まで7万人超に実施しました。④多くの人が事実について書かれた短文を正確に読めていないことが分かり衝撃を受けました。深刻なのは本人に自覚がないこと。読書好きといいながら、実は短文を正確に読めない人が実に多い」

「テストを受けた人の多くが文章が読めるとはどのような状態か、そもそも分かっているか。中学に進学して数学が嫌いになったという人は少なくありませんが、実は⑤単に数学の教科書が読めていなかったからだとこのケースが多い。読むとは何か分からな
いまま、大学に進み、多くの人が20代を迎えているのです」

「教科書や新聞の文章、辞書が正確に読めれば、数学やプログラミングの教材は読める。プログラミングは自分で学べます。私たちの調査から、教科書をきちんと読めれば、学力が伸びることがはっきりしている。学習しても学力や生産性が伸びないのは説明文を正確に読めないためです」

—— AIを恐れる前に、読解力が先ですね。

「読解力が不足しているとミスが出やすい。すると多忙になりすべてが後手に回ってしまう。そんな状態に陥る前に、読解力をつけた方がいい。知識量を求める前に、新聞のひとつの記事を一字一句読む。どういう「⑥」か考えながら、じっくり文字を追う。ノートに要約を書くのもいい」

「自分の頭で考えることが大事です。効率が悪いと思っても、腑（ふ）に落ちるまで読み込む。1年続ければきっとすばらしいことになる。そうした努力を続けられれば、それほどAIを恐れる必要はないはずです」

新井教授はこれからの世界を乱世とみている。人間の仕事の多くがAIに置きかわるような社会では、世の中を動かすしくみがすっかり変わる。

変化に合わせて、働き方なども劇的に変わると予想される。進学や就職への影響が大きい学び方も例外ではない。⑦技術進歩に対応した最新の手法や奇抜なアイデアが求められる、と思われがちだ。

だが、そうではないという。乱世ほど地道なやり方しか通用しなくなると指摘する。

世の中が安定しているときは、いろんな条件も動かない。その中では、変わった方法でもうまくやっていける。だが、乱世には

前提となる様々なしくみが崩れてしまう。Cフヘン性のある、どこでも通用するものしか生き残れないそうだ。

⑧急がば回れ。AIに負けないためには、一人ひとりの基礎基本となる読解力、論理力などの力を地道に鍛えるのが近道ということになる。

(日本経済新聞 二〇一九年六月一七日)

〔注〕 * ホワイトカラー|| 広く事務系の職種を指す言葉。専門職・技術職、対人サービス等も含まれる。

問一 ―線①「進化したくシンギュラリティー」について、新井紀子氏あらいのりこは著書『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』の中で「シンギュラリティー」を【文章X】の通り説明しています。シンギュラリティーが起こると「進化したAIが人類を支配する」と人々が考えてしまうのはなぜだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。（なお【文章X】の「シンギュラリティー」は本文中の「シンギュラリティー」と同じである。）

【文章X】

シンギュラリティーのもともとの意味は非凡、奇妙、特異性などですが、AI用語では正確には technological singularity という用語が使われ、「技術的特異点」と訳されます。それは、「真の意味でのAI」が、自律的に、つまり人間の力をまったく借りずに、自分自身よりも能力の高い「真の意味でのAI」を作り出すことができるようになった地点のことを言います。1未満の数字はいくら掛け算しても1より大きくなることはありません。それどころか、無限に繰り返すと限りなくゼロに近づいていきます。けれども、 $1 \cdot 1$ でも $1 \cdot 01$ でも、 $1 \cdot 001$ でも、1を少しでも超える数は、掛け算を続けていくと無限に大きくなっていきます。「真の意味でのAI」が自分自身よりも少しでも能力の高い「真の意味でのAI」を作り出せるようになれば、それをものすごいスピードで繰り返し続けることで、無限の能力を持った「真の意味でのAI」が生まれるのではないか。だから（この「だから」は非論理的ですが）、「真の意味でのAI」の能力が劇的に向上するその地点をシンギュラリティーと呼ぼう、というわけです。そのようなコンピューター（「真の意味でのAI」と書くのに疲れました）は当然、なんだかよくはわからないけれども、人間の能力を上回るに違いないと信じる人々が一定数いるのです。

ア AIが圧倒的な速さで学習を続ければ、間断なく変化し人間より早く進化を遂げるだろうことが容易に推測されるから。
イ 人間の手を離れたところで自律的にAIが知性を高められれば、人間を愚かなものとして軽くあしらう日も近いから。

ウ 人間は現状よりも優れたプログラムを生み出せるため、人を動かす水準にまで AI を進化させることができるから。

エ 1 を少しでも超える数は、掛け算を続けていくと無限に大きくなるため、AI が無限に能力を高めることになるから。

オ AI が人間の力を借りず無限の能力を得るならば、人間の能力を上回り人間を従わせる日が来るだろうと考えているから。

問二 — 線② 「有能な人材」とありますが、AI を使うプログラマーに欠かせない力とはどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。解答の順序は問いません。

ア すべての学習の基礎基本にあたる読解力。

イ 仕様書を読みとり、不備を適宜修正できる力。

ウ 英語力を前提としたコミュニケーション能力。

エ 確率・統計・行列・微積分といった数学の力。

オ 生産性を伸ばすためのプログラミング能力。

問三 — 線③ 「かえって」のここでの意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ここまで

イ むしろ

ウ 徐々に

エ そもそも

オ 案の定

問四 一線④「多くの人が事実について書かれた短文を正確に読めていない」ことについて、新井紀子氏は以下の問題その他を全
国の大学生約六千人に解いてもらうという調査をしています。調査で出された以下の問題を読んで(一)・(二)・(三)の問いに
答えなさい。

次の報告から確実に正しいと言えることには○を、そうでないものには×を、左側の空欄に記入してください。

公園に子どもたちが集まっています。男の子も女の子もいます。よく観察すると、帽子をかぶっていない子どもは、みんな女の子です。そして、スニーカーを履いている男の子は一人もいません。

- (1) 男の子はみんな帽子をかぶっている。
- (2) 帽子をかぶっている女の子はいない。
- (3) 帽子をかぶっていて、しかもスニーカーを履いている子どもは、一人もいない。

(一) (1) (3) を順に答えた際、正しい答えの組み合わせはどれですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ○—○—× イ ○—×—○ ウ ×—○—○ エ ○—×—× オ ×—×—○

(二) この問題の正答率に言及しながら、新井紀子氏は著書(前掲)の中で【文章Y】のように述べ、別途この仮説を検証する調査を行っています。本文全体の趣旨を踏まえ、空欄乙に入る最も適当な言葉を本文中から二字で抜き出しなさい。

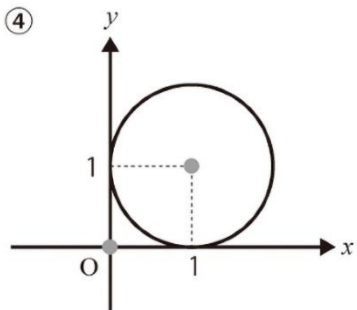
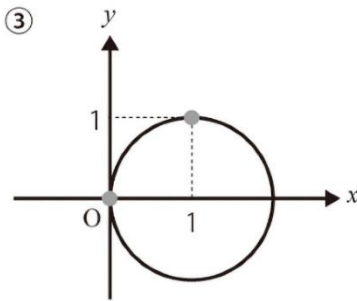
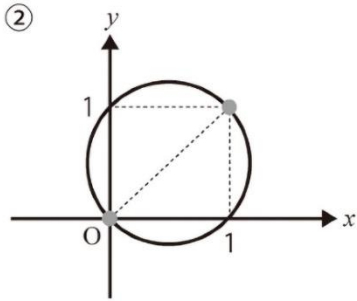
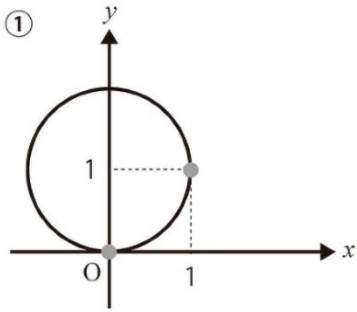
【文章Y】

この問題の正答率は $64 \cdot 5\%$ でした。入試で問われるスキルは何一つ問うていないのに、国立Sクラスでは 85% が正答した一方、私大B、Cクラスでは正答率が5割を切りました。では、多くの高校生が憧れる私大Sクラスはどうだったか。国立Sクラスに比べて20ポイントも低い $66 \cdot 8\%$ に留まりました。どこの大学に入学できるかは、あじが学習量でも知識でも運でもない、論理的な「Z」と推論の力なのではないか、6000枚の答案を見ているうちに、私は確信するようになりました。

問五 ー線⑤「単に数学の教科書が読めていなかった」ことを示唆する事例として新井あらいのりこ紀子氏は著書（同前）で以下の問題の解答状況を調査し、議論を進めています。この調査からどのような傾向が見えれば、ー線⑤の見解を導く証拠となりますか。この問題の正解に言及しつつ三十文字以内で答えなさい。

次の文の内容を表す図として適当なものを、①～④のうちからすべて選びなさい。

原点Oと点(1,1)を通る円がx軸と接している。



問六 空欄「⑥」に入る言葉として最も適当なものを本文中から二字で探し、抜き出しなさい。

問七 ー線⑦「技術進歩に対応した最新の手法や奇抜なアイデアが求められる、と思われがちだ」とありますが、その理由となる部分を本文中から十一字で探し、抜き出しなさい。

問八 ー線⑧「急がば回れ」と筆者が述べているのはなぜですか。六十字以内で説明しなさい。

問九 ー線A「ダイタイ」・B「ソウバン」・C「フヘン」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(一画一画丁寧にはつきりと書くこと。)

〔三〕 次の文章を読んで、後の一〜九の各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

とんびは信濃しなのの鉦*1たたき

一日たたいて米三合*2

はれた秋空をとんびがゆうゆうと大きな弧をえがいてまうている。それがときどきピーヒョロロとなく。見あげる子供たちがこ
ういつてはやす。とんびはもとは多い鳥であった。そしてその悠々たる姿とすきとおるようななき声が高い秋空をふるわせると、
人々は思わず空をあおいだし、また何とない明るさをおぼえて野の仕事にはげんだものだが、①子供たちにとつてもそれはなつか
しい自然の友であった。こうしたことから子供たちはこの鳥にしたしみをおぼえていったのである。

カラスなどもともと作物をあらす鳥として決して農民に喜ばれはしなかったが、人間とは深い交渉をもっていて時に追われも
したが時にまた迎えられる鳥でもあった。鎌倉、室町時代の絵巻物を見ると、カラスはきまったように人の死体をついばんでいる
か、乞食*3小屋の屋根に群れている。人間からは憎悪の眼で見られているように思われるが、そればかりではなかった。東北地方を
あるくと、今日もなお正月十一日にカラスの餅もちなげというところがおこなっているところがすくなくない。土地によっては雪の積む
野に出て、シナイ、シナイとか、あるいはロウ、ロウなどと大声でよびつづけると、どこからかカラスが出て来て、近くの木の梢
にとまる。そこで餅もちを空に向ってなげあげると、カラスはたくみにこれを空中でうけとめて、山の方へもっていくという。そして
それをうけとめて持つていくような年は豊年だということである。

土地によつては餅もちを苞つつとに入れて木の枝にかけておくこともある。やはりカラスが来て餅もちをもつていく。先年秋田地方をあるいた
とき、高い木の枝に苞つつとがかかっている、何のまじないであろうかと思つてきいて見るとカラスにそなえた餅もちの苞つつとだとのことだ
あったが、苞つつとを木の枝にかけたときはそこが手のとどくほどのところであった。それが雪がとけてしまうと、そこが大へん「A」

ところに見え、どうしてそんなところへかけたかと思われる。さて村の人たちは、そのかけた場所が雪がとけた後に地上から見あげて、「A」か「B」かで豊凶をうらなうという。「A」年は豊作、「B」年は不作だというのである。「A」年は雪の深い年であり、そういう年は豊作だとは今日もひろく言いつたえられている。人はカラスへ餅をそなえることによつて、そうした観察もおこなつたのである。しかもカラスに餅をそなえることはかつて広く各地に見られ、広島県の宮島などではそれが一つの神事にさえなっている。

カラスという鳥はもと実に多かつた。それが夕方など群になつて夕焼空をうずまいてとんでいた。いわゆるねぐらがあつて、そこへかえつていくのだが、朝、方々へわかれわかれにとんでいつていたものが、夕方になるとまた戻つて来て一つの群になり、ねぐらへかえるのである。そのさまは壯観であり、また子供たちの眼にもとまつて童謡の対象にもなっている。

こうして小さいときからこの鳥とのたえざる交渉と注目から、この鳥のなき方一つによつて吉凶をさえ知ろうとするようになった。カラス啼きのよしあしは全国に言われるところであり、カラス啼きがわるければ死人があるか否かは別としても、こまやかな配慮と注意から、その啼き声や動作の中に自然に関連する何ものかをかぎわけるようになったと思われる。瀬戸内海の小さな島で話だが村の後の丘の大きな松の上へカラスが来て明るい声でなくと、きまつたようにその日はイワシが豊漁だとのことで、これを漁ガラスと言つていたが、事実私がここを訪れた日も漁ガラスがないたので村はわきたち、船をこぎ出していつて豊漁を得た。

こうしてカラスは一方ではきらわれつつ、他方ではまた大へんしたしまれもし、人間の愛情の中におかれ、一種の②くされ縁のようなものを持つていたということは、人間とその人生をともしする面が多かつたためである。

カラスだけではない。昔話などに出て来る鳥の数は多い。スズメ、ツバメ、キジ、ホトトギス、キツツキ、カッコウ、モズ、ミズク、フクロウ、ハト、ヒバリ、ウズラ、ジウイチ、水恋鳥、ワシ、ヨシキリ、ミソサザイ、カリなどがそれであるが、子供たちは周囲にいる小鳥を人間の世界につながるロマンスを通じて親しみの眼をもつて見つつ次第に交渉をふかめていつたのである。

そしてそれはひとり鳥のみに限らず、獣や昆虫や、あるいは植物などについても同様であつた。つまりその初は単に科学的な観

察によって生物の世界を理解していったのではなく、人間につながるものとして理解したのである。そして対象への観察をふかめていったのであるが、かつてはこうした動物の数は実におびただしかった。それがここ三四十年来急速にへっていった。そのへり方は物すごい。一つは農作物に被害を与える害鳥、害虫として駆除され、一つは人間の勢力がよくなってそうしたものの住む世界をうばっていったためである。

カラスなど撃たれていなくなるよりも人間社会が拡大したり、餌が得られなくなったことから減少したと見られる場合がすくなくないが、それにしても減り方が急速で、もう夕焼空にゆうやけどらうずまく壯観は何ほども見られなくなった。

ことに戦後農薬の発達からツバメのように駆除しようとしなかった鳥さえ、年々著しい減少を見せはじめている。そういう意味で自然は急にさびしくなつて来たばかりでなく生物に対する話題もいちじるしく減つて来たのである。

元来科学的ということとはただひややかに対象を見つめ、その中から客観的な事実をひき出し、その中から法則や構造を見出すみいだけではなかった。むしろそういうことは非科学的である場合さえあった。農民の考え方や慣習や行動の調査をする場合に、ただ学的に機械的におこなつた場合と、できるだけ農民にとけ込み親しくしておこなつた場合、結果はまるで逆になつてあらわれたことがあるが、そうしたとき、テストする対象も、方法も一つでありつつ、どうしてそうなつたかということが問題になるが、一たいどちらが科学的な態度だということになるだろうか。

ちかごろ、自分と立場を異にするものをつめたく冷やかに見、その欠点をあげつらうことを批判と心得、批判精神が旺盛だと心得ている人が多いのだが、対象の中へとけこみその本質的なものにふれることなくして本当の批判というものが有り得るだろうかと思つて見る。そういうことになると思つて対象を見る見方が大へん大切になつて来るのだが、今日はたしてそういうものが日常生活や社会生活の中でどんなになつてゐるのだろうか。

現実の問題として自然が年々さびしくなつていき、③自然が生きた世界としてでなく、死んだ世界としてとりあつかわれようとしてゐることが一たい民衆の生活を心ゆたかにするものであろうかどうか。

とにかく、現状の中で④人間として貴重な何ものかが科学的という名のもとに失われていきつつあるのではなからうか。文化がすすむにつれて、われわれはいろいろのことを教えられ、気づいて来、ひろい世界のことをも知るようになって来た。しかしそれは自分の努力によって、あるいは愛情のからみあいによって得たものがどれほどあるだろうか。その多くはテレビやラジオや書物によって容易に身につけたものが大半であるといっている。そこには愛情による対象とのつながりも、またそれによる努力も、努力によってつくり出される創造性も大へん稀薄だといえるのではなからうか。アンリ・ファアブルが炎天の下のほこりっぽい道におとされた馬糞ばふんの掃除屋の糞虫ふんちゅうを何日も何日もかけて見つめた努力、その中から得た糞虫ふんちゅうの生活の実態とその英知といったようなものそれは、その多くの努力のむくいられるほどの感激を彼に与えたのであるが、そうした素地はまず人と自然のあたたかなつながりの中にあるのではなからうか。

それにはどうしても自然そのものに、できるだけ多くふれる機会を持たなければならぬ。古くは人間はいやおうなしに自然の中に居おらされたのである。そしてその自然のきびしさや気まぐれもいやというほど思い知らされつつ、時にはあまやかされもした。

戦争がすんで間もないころのことであった。沖繩からやって来た人の話たがひに、戦たたかいにやぶれ、そこに永年つみかさねて来た文化のほとんどを失ってしまい、昔の自然のままの姿にかえった生活は大へんわびしいものであったという。どこへいくにもみんな徒歩、それも履物さえ乏しくなってはだしが多く、着るものも新しいものではなくて、もう櫃*6ひつの底にしまつてあったようなものを出して着、食うものもイモやソテツの実が主で、夜ともなれば電灯もともらず、ランプもなく、日がくると明るいうちに夕はんをすます。子供たちは昼の光をおしんで、くらくなるまで外ではしゃぎまわるが、大人は家の中にポツネンと居て、すっかりくれてしまうと、それからすこしばかり炉薪をたいて明りとするが、それも薪のとぼしさから間もなく寝につく。夜はまったく寝るよりほかに方法のない暗い闇がふかく静寂にすべてのものの上をつつむ。闇夜には村の道のあるく者すらない。そしてそれは夜のあけるまでつづくという。

人住まぬ山中ならともかくとして人の住む世界に全然明りがなかったとしたならば、その中に生きる者の感ずる自然の威圧はま

た一しおつよいものであるだろう。自然がこうまで深刻なものであったとは沖縄のようなどころに永年住んでいてさえ気付かなかったという述懐はつよく私の心をうったのであるが、ひとり沖繩ばかりでなく電灯を持たず、ランプを持たなかつたころの日本もそういうものであつただろう。その闇の中できいてこそ秋虫の声も大地の声のようにききとれたし、また時のうつろいをその中に感じる事ができたのであろう。古い時代の人が自然を感じとつたのはこうした環境の中であり、それはそのまま自然と深い接触を持たざるを得ないものがあつた。

この自然の重さの中で、時にはこれをはらいのけようとし、時にはこれにしたしみ、もつれあいにくしみあいつつ私たちは自然の本質というものをすこしずつ見きわめて来たのである。それだけに自然を見る眼はこまかであり切実であつたともいえる。迷信も科学もこうした中で芽吹き育つて来た。

(『伝書鳩でんしよぼとのように』 宮本 常一みやもと つねかず)

〔注〕

- * 1 鉦かね 合図などのために鳴らす楽器。
- * 2 合 容積を表す単位。約〇・一八リットル。
- * 3 乞食小屋こじき ここでは「粗末な小屋」の意。原文の表記をそのまま用いた。
- * 4 苞つと 藁わらなどを束ねて両端を縛り、物をくるむもの。
- * 5 アンリ・ファールブルひつ 一八二三〜一九一五。フランスの博物学者、昆虫研究家。
- * 6 櫃ひつ ふたが上に開く大型の箱。

問一 筆者は、冒頭の「とんびは信濃しなのの鉦かねたたき／一日たたいて米三合」を、後述で「鳥追歌」と記しています。それを踏まえる
と、村のどのような様子がうかがえますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えな
さい。

ア とんびの声が、田んぼを荒らす小鳥を追い払っている。

イ 村人が、田んぼに集まり寄るとんびを追い払っている。

ウ とんびの声が、信濃しなの地方の勤勉な米作りを讃えている。

エ 大人は、農作物に被害を与えるとんびを忌み嫌っている。

オ 村人は、信濃しなのの秋空に響くとんびの声に聞き入っている。

問二 —線①「子供たちにとってもそれはなつかしい自然の友であった」とはどういうことですか。その説明として最も適当なも
のを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子供たちは生物の鳴き声を実によく知っていて、遊びの最中でもふとした瞬間に、季節の到来を感じていたということ。

イ 子供たちの鋭い観察眼は生物の生態を見分けることができ、それが子供たちの日ごろの遊びにつながっていたということ。

ウ 自然の中で遊ぶ子供たちにとって、悠々と秋の空を飛ぶ生物の姿は、見ていて気持ちのよいものであったということ。

エ 生物が自然環境の中で生きている様子が、好奇心旺盛な子供たちの遊びの中で懐かしさ呼び起こしていたということ。

オ 自然の中に生きる生物が、自ずと自分たちの暮らしに関わるものとして子供の遊びの中に取り入れられていたということ。

問三 空欄「 A 」・「 B 」に入れるのに最も適当な形容詞を考え、それぞれ答えなさい。

問四 —線②「くされ縁」の本文中での意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 離れられないで、ただただらと続いている関係。

イ 様々なことかかに関わる、切っても切れない関係。

ウ 好ましくない状態だが、親愛を抱かざるを得ない関係。

エ 長い関わりなかの中で、自然と離れていく関係。

オ 持ちつ持たれつつの、お互いに長く支え合う関係。

問五 —線③「自然が生きた世界としてでなく、死んだ世界としてとりあつかわれようとしている」とありますが、それは近年の科学的な見方においてどのようなことを意味していますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 対象そのものの中にとけこむことをせずに、むしろ対象とその周辺とのつながりに注目して批判をし、科学的な法則や構造を見出みいだそうとしているということ。

イ 対象そのものが少なくなつて実際に触れる機会が減つても、残された対象を日常的に見つめ批判することによって、法則や構造を見出みいだそうとしているということ。

ウ 対象そのものが減る中でかつての人間との関わりも減少し、対象の本質的なものにふれることなく批判をし、科学的な法則や構造を見出みいだそうとしているということ。

エ 減りゆく対象を危惧するものの、その改善を試みることなく、その中から客観的な事実をのみ引き出すことで、科学的な法則や構造を見出みいだそうとしているということ。

オ 人間が対象といかなる深い接触があるうとも、二者は相容あひいれない存在であるという立場をとり、ひややかに科学的な法則や構造を見出みいだそうとしているということ。

問六 —線④「人間として貴重な何ものかが科学的という名のもとに失われていきつつある」とありますが、「失われていきつつある」ものとは具体的に何ですか。それが含まれている一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出さない。

問七 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつての人々は、日常的に、生物に対する細やかな交情を持つことを通して自然にとけこむことができ、科学の芽を育てて来た。

イ かつての人々は、生物への科学的観察を深めることでそれを取り巻く自然の驚異を意識するようになり、自然の管理を指すようになった。

ウ かつての人々は、生物に対して細やかな配慮と注意を払い、日常的に自然の尊厳を感じることを通して、科学に依らない生活をしていた。

エ かつての人々は、自然の本質を見きわめようと努力を重ねた結果、生物と人間の関わりにおける科学的な法則や構造を見出した。

オ かつての人々は、厳しい自然の威力に耐えながらも、身近な生物に対して畏敬の念を持つことによつて、科学的な観察眼を身につけた。

問八 本文の表現に関する説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この文章は、筆者の体験をもとに筆者の視点で語られているが、必要に応じて村人たちの視点も取り入れられて語られるので、昔の日本人が自然をどのように捉えていたのかがわかりやすく述べられている。

イ 文章中の「ピーヒョロロ」「シナイ、シナイとかあるいはロウ、ロウ」などの擬声語は、場面の臨場感を生み、子供たちが自然の中で大声を出しながら生き生きと遊んでいる様子が述べられている。

ウ この文章は、筆者が日本各地を歩いて、そこに生きる生物と人間との関わりを丹念に調べ、特に鳥の鳴き声が村人の営みに深く関わっている事実を突き止め、その具体的事例をわかりやすく述べている。

エ 文章中の「だろうか」「であろうかどうか」「のではなからうか」「のだろうか」などの、読者への投げかけを多用している

部分では、近年の科学的な見方に関しての問題点を明確にし、自己の見解を述べている。

オ この文章では、筆者が歩いた日本各地の村人の生活が軸として展開しており、それとは対比的な、科学の発達によって自然を見る眼を失ってしまった傲慢な人間の姿を客観的に述べている。

問九 自然が年々さびしくなっている現代において、人間の生活を心ゆたかにするために何が必要だと筆者は考えていますか。五十字以内で答えなさい。

受験番号

氏名

得点
※
100

一

問一
オ

問二
ア・エ

問三
イ

問四
i
エ

ii
読
解

*完全解答・順不同可

| | |
|----|---|
| 問五 | |
| と | 多 |
| 指 | く |
| 摘 | の |
| で | 解 |
| き | 答 |
| な | 者 |
| い | が |
| と | 、 |
| い | 正 |
| う | 答 |
| 傾 | は |
| 向 | ① |
| 。の | |
| | み |
| | だ |

問六
意
味

問七
先
が
見
え
な
い
時
代
だ
か
ら

| | | | |
|----|---|---|---|
| 問八 | | | |
| な | る | 、 | 世 |
| い | 読 | 基 | の |
| 機 | 解 | 礎 | 中 |
| 械 | 力 | 的 | の |
| に | が | で | 仕 |
| は | あ | か | 組 |
| 負 | れ | つ | み |
| け | ば | 普 | が |
| な | 、 | 遍 | 変 |
| い | 意 | 的 | わ |
| か | 味 | な | る |
| ら | を | 能 | 乱 |
| 。理 | 力 | 世 | |
| | 解 | で | で |
| | し | あ | も |

| |
|----|
| 問九 |
| A |
| 代替 |
| B |
| 早晚 |
| C |
| 普遍 |

一の問九 各2点×3=6点、一の問三・問四 各3点×3=9点、一の問八 8点、二の問九 12点
他 各5点×13=65点(一の問2, 二の問3は完答) 合計100点

二

問一
ア

問二
オ

問三
A
高い
B
低い

問四
イ

*完全解答 *平仮名も可

問五
ウ

問六
そ
こ
に
は
愛

問七
ア

問八
エ

| | | | |
|----|---|---|---|
| 問九 | | | |
| る | っ | れ | 自 |
| こ | て | 、 | 然 |
| と | 、 | 自 | そ |
| 。そ | の | 然 | の |
| | の | と | も |
| | 本 | 深 | の |
| | 質 | く | に |
| | を | つ | で |
| | 見 | な | き |
| | 極 | が | る |
| | め | る | だ |
| | よ | こ | け |
| | う | と | 多 |
| | と | に | く |
| | す | よ | 触 |

50

5

60

11

30